

顔認知機構を心理物理学的に調べるためのプローブとして近年注目を集めている顔残効が触覚でも生じることを報告

松宮一道（東北大学電気通信研究所 助教，公募班員，Corresponding Author）は，触覚顔刺激としてフェイスマスクを使い，触覚順応顔の表情に依存して触覚テスト顔が反対方向の表情として知覚されることを *i-Perception* 誌に発表しました。

Matsumiya K (2012) Haptic face aftereffect. *i-Perception* 3(2), 97-100.

論文は下記からご覧になれます。

<http://i-perception.perceptionweb.com/journal/I/volume/3/article/i0496sas>

ある表情を持つ顔を見た後，中立顔を見ると順応顔の反対の表情を持った顔として知覚されることが知られています（顔残効）．この顔残効は顔処理に含まれる神経表象を調べるための強力なツールとして注目を集めています．顔残効は，主に視覚に特化した現象であると考えられていました．しかし，近年，触覚でも顔を認知できることが報告されているため，本研究では，触覚で顔残効が生じるかを調べました．被験者は，喜び顔か悲しみ顔のフェイスマスクを目を閉じて両手で 20 秒間触った後，中立顔のマスクを 5 秒間触り，その表情を応答しました．その結果，順応顔の表情に依存して，テスト顔が反対方向の表情として知覚されました．これより，触覚においても顔残効が生じることが示唆されます．したがって，まだ未知な部分が多く残された触覚顔処理においても顔残効をプローブとして調査できることを本研究は示しています．本研究は著者が知る限り，触覚だけで顔順応が生じることを報告した最初の研究になります．



図 1 触覚顔刺激

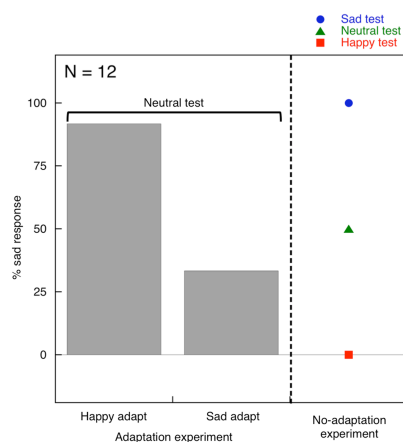


図 2 テスト顔を悲しい顔と
応答した割合